



南阿蘇村立南阿蘇中学校 学校だより

ハーモニー



R3. 12. 3(金) No.31 小柳 弘志

世代交代のとき ~生徒会選挙~

今月の17日(金)に生徒会選挙が行われます。現、執行部のメンバーは南阿蘇中学校

をより良くするために尽力してくれました。コロナ禍で制限された活動であっても、自分たちにできることを考え、話し合いを通して、今年はフラワープロジェクトなど新しい内容にも取り組みました。そんな頑張った先輩方からの世代交代の選挙です。

次は現2年生、1年生の中から生徒の代表となり南阿蘇中学校の新しい顔として頑張るなかまを選んでいく選挙です。生徒のみなさん1人ひとりが責任を持って考え、選んでいきましょう。また、2年生のみなさんには特にリーダーとして頑張ってもらいたいと思います。大きな責任もありますが、充実感もあります。それは現3年生の執行部の頑張る姿から伝わってくると思います。



(生徒会フラワープロジェクト説明の様子)

また、現、執行部のみなさんは1年間、大役お疲れ様でした。あと少しの期間ではありますが、新生徒会のメンバーが決定するまで、よろしくお願ひします。また、その後も後輩の頑張りを見守ってください。

3年生の部活動特待生等の勧誘が終わって

今週いっばいで3年生の三者面談が終わりました。この期間

中にいくつかの高校から先生が来られて、本校の特定の選手に対し、その高校への部活動勧誘の話がありました。本人、保護者、担任、部活動顧問と来校された高校の先生で話をしましたが、その度に感心させられることがあります。

高校は違っても、来校される先生方は、まだ入部もしていない生徒の情報を詳しく知っておられるということです。まだ入学もしていない生徒のことを試合を見たり、練習を見たり、競技協会の人に尋ねたりして、知っておられるようです。情報をしっかり集めておられ、高校で更に本人の力を伸ばすためには高校3年間でどんな実践(勉強・練習)を重ねればいいのかを考えて面談の時に提案されます。すべての勧誘に来られた先生が競技力の向上だけでなく人間的に成長できることが大切で、そのような指導を我が高校では行いませと話されます。

この先生方のように、1人の生徒のことをしっかり知って教育を行いたいものだと考えさせられました。「誰1人取り残さない教育」と最近、よく言われますが、3年後の卒業時の姿をイメージして中学校でも教育を行っていかねばと再確認しました。



「言葉のキャッチボール」「心のキャッチボール」が大切なことが伝わってくる作文を読みました。みなさんにも紹介します。

「私と弟の当たり前」 熊本県人権作文特別賞(熊本地方法務局長賞)より

ピンポン。友人が家の玄関のベルを鳴らします。中学校に入学して、私は毎日友達と一緒に学校まで自転車で通学しています。希望したバレー部で、新しく出来た仲間とも仲良くスポーツに励んでいます。週末は友達と一緒に家で宿題をしたり、公園で遊んだりして、何不自由なく充実した日々を過ごしています。しかし、私にとっての何げない日常は、他の誰かにとっては、当たり前のことではないのかもしれませんが。

私には2歳年下のダウン症の弟がいます。ダウン症の特性として全体的に成長がゆっくり発達し、多くの場合、知的な発達に遅れがあるとされています。そんな弟と私は今まで一緒に生活してきて、うらやましく思うことがたくさんありました。

例えば、マラソン大会で私が4位を取っても一言だけ褒められただけでしたが、弟が最下位で最後まで完走したことには、両親も大喜びで、その日の晩ご飯は弟の大好物の寿司でお祝いをしてもらっていました。また、勉強面でも弟は楽しそうに、ゆったりと自分のペースで学習しています。毎日、プレッシャーなく何一つ苦勞しなくて過ごしているようにしか見えませんでした。しかし、私は中学生になって、実は弟は、やりたいことを自由に出来ていないのではないかと思うようになりました。

例えば、習い事です。弟にはやってみたい習い事がたくさんあります。それは野球、サッカー、バスケットなどのチームで行うスポーツです。しかし、弟は周りの支援が必要で、なかなかそういった習い事をするのは難しいです。両親もそういった習い事をさせてあげたいけど、周りへの気遣いを考えて遠慮しているところがあるようです。まだまだ私の地域は、障がいのある子どもたちは、一般的な習い事に入りづらい環境です。そのような環境だから、選択出来る習い事も限られます。選択が限られる事で、障がいがあるから出来ないと判断する人達が多くいるように感じます。

実際に弟にもそういう経験がありました。それは弟が一つのグループのリーダーをしたいと言った時でした。そんなに難しくない役割で、弟が簡単に出来るようなリーダーの仕事でした。けれど当たり前のように出来ないと勝手に決めつけられました。私はとても悲しくなりました。多くの人は弟の障がいについてよく知らないから、初めから出来ないと思い込んだのに違いありません。私の弟のように障がいがあり、本当にやりたい事を我慢している人は沢山いると思います。私は多くの人に、弟のように障がいがある人をもっと理解して欲しいです。

ある日の事です。弟は学校から帰って来ると、とても張り切った様子で「誰が歴史クラブ長になったでしょう？」とニコニコしながら聞いてきました。私が「誰かなあ？」と聞き返すと、満面の笑みで、「僕だよ。」と応えました。今までそのような機会を与えられなかった弟にとって、とても大きな出来事でした。私は弟の喜んでいる姿を見て、もっとこういう機会が増えたら良いなと思いました。

また、こんな事もありました。弟の友達の一人が家に突然遊びに来た時の事です。最初は弟もびっくりした様子でしたが、家でゲームをしたり、サッカーをしたりして仲良く遊びました。そして、その友達が帰った後、両親は涙を流していました。私は何で泣いているのか分かりませんでした。理由を聞いてみると、それは弟にとっての初めて友達が遊びに来た日で、両親はあまりにも嬉しくて、思わず涙が出たそうです。私にとっては友達が家に来て遊ぶことは当たり前だと思っていたので、両親が涙を流しているところを見て、考え方が変わりました。

友達が家の玄関のベルを鳴らして毎日一緒に学校まで自転車で通学したり、希望したバレー部で仲間と一緒にスポーツに励んだり、週末に友達と一緒に家で宿題をしたり、公園で遊んだりする充実した日々は当たり前の出来事ではなく、日常に感謝すべき事であると気付かされました。

私は世の中の多くの人が、弟のような障がいがある人と接する機会をつくり、今よりも少しでも知って欲しいです。そして、これからの未来が障がいのある人々がやりがいのある役割を果たしたり、自分のやりたい習い事などの活動を選べるような思いやりのある優しい社会になることを強く願っています。